



「岩石者」とは

がんじゃくもん

岩石者

GAN JAKU MON

古くは岩石山を神宿る山として崇めた人々、この山に城を築き戦略の拠点とした多くの武将たち、さらにその山麓で今日まで暮らし続けてきた人々や、今も毎日のように山歩きを楽しんでおられる方々まで、岩石山に興味を抱き、岩石山に魅了され、岩石山にまつわるすべての人々を本書では敬愛の意を込めて「岩石者」と呼ばせていただきます。本書をお手に取った貴方も、今この瞬間から「岩石者」というわけです。

岩石山の山頂にある国見岩には
梵字が刻まれています。ここが九
州最大の修験道場・英彦山の領
域であったことがうかがえます。

付録MAP ①



山伏たちの加持祈禱の場と
いわれる岩石不動明王

付録MAP ②

その名は「岩石山」

がんじやくさん

平清盛が城を築き、
地方豪族たちが奪い合い、
天下の秀吉に攻められ、
剣豪・佐々木小次郎の
出生地と噂される山……



岩石山は福岡県添田町の北端、
東側の赤村と接する標高454m
の山です。かつては英彦山信仰圏の
領域で、山伏たちの修行場として
栄えた山でした。また山頂には中世
の山城・岩石城が築かれ、一國一城令
で廃城になるまで、多くの城主が入
れ替わりました。麓には城下町も
形成され、日田道(旧小倉街道)沿
いには、白壁の商家・中島家住宅
(国指定重要文化財)などの街並み
があり、歴史的に見ても価値の高い
地域とされています。

添田公園から岩石山にかけて
は、毎日のように周辺の自然散策
に出かける常連も少なくありませ
ん。登山道もよく整備され、山頂に
は岩石城跡の遺構や巨石群、そし
てなにより山頂からの眺望の良さ
と四季折々の自然景観で、訪れる
人を魅了しています。添田公園から
山頂まで歩いて1時間ほどで登れ
る手軽さで見どころの多い山とし
て一度登ればまた何度も来たく
なる魅力あふれる山なのです。



奥の院にある登山ノートに名前と登った時刻を記しておこう。付録MAP E

リビングほどの広さがある八畳岩。ランチはここがいいね！ 付録MAP B



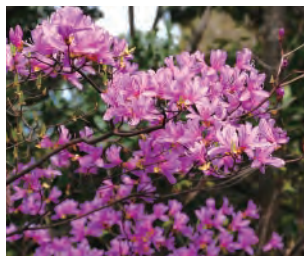
岩の間にはまる巨大なチョッキストーン！ 付録MAP A



国見岩から見る筑豊平野。まさに絶景！ 付録MAP D

岩石山に登ってみよう

奥の院から山頂までは、岩石城の遺構にたくさん出会えます。柱穴、堀切り、楔岩、本丸跡、瓦片もたくさん落ちていました。山頂から東側の尾根には、国見岩、大砲岩、八畳岩などユニークな岩が点在しています。とくに国見岩からの眺めは最高です。八畳岩から尾根を下って行くとさらに大きな巨石群を見ることが出来ます。ここは赤村側の駐車場からも近いので楽に見にすることが出来ますよ。それにしても大きい…大きすぎます！赤村側線の登山口に下りたら、林道弓張岳線から鷲越へまわり、桜植栽地から添田公園へのんびり歩いて帰る方も多いようです。手つかずの自然が残された岩石山では興味深い植物もたくさん見られます。春はタムシバ、コバノミツバツツジ。夏はオカトラノオ。秋はハゼやモミジの紅葉など、岩石山から麓の添田公園一帯を彩る四季の草木花が訪れる人々の目を楽しませてくれます。



「コバノミツバツツジ」 4月に咲く岩石山の名花。紫色の花の内側に斑点があります



「タムシバ」 3〜4月上旬、岩石山に春を告げる花。コブシによく似ています



「オカトラノオ」 6〜7月、奥の院に咲く、尾根のようにしなやかにカーブした花穂が特徴

岩石山ってちょっと変わった名前…その名の通りここは岩の山です。山のいたるところで大きな岩が迎えてくれます。山頂近くの大きな岩の上から見る景色はとってもいい眺め♪やはり山登りに絶景は欠かせないですよ。標高454mは決して高くはありませんが、この眺めを一度見たらもう岩石山の虜(もよお)で、これで私も「岩石者」の仲間入りです！

岩石山に登るルートは、そえだジョイの脇から奥の院を経て山頂へ登る通称「正面ルート」が駐車場からも近くてお勧めです。奥の院にはテーブルやテントがあり、休憩や雨宿りにも最適。テント内にある登山ノートには、毎日登った方々の名前と時間が記されています。今日はすでに50人ほど記名があり、一番乗りは、なんと深夜の3時でした！

巨岩、山城、絶景、希少植物… 岩石山は自然の宝庫。

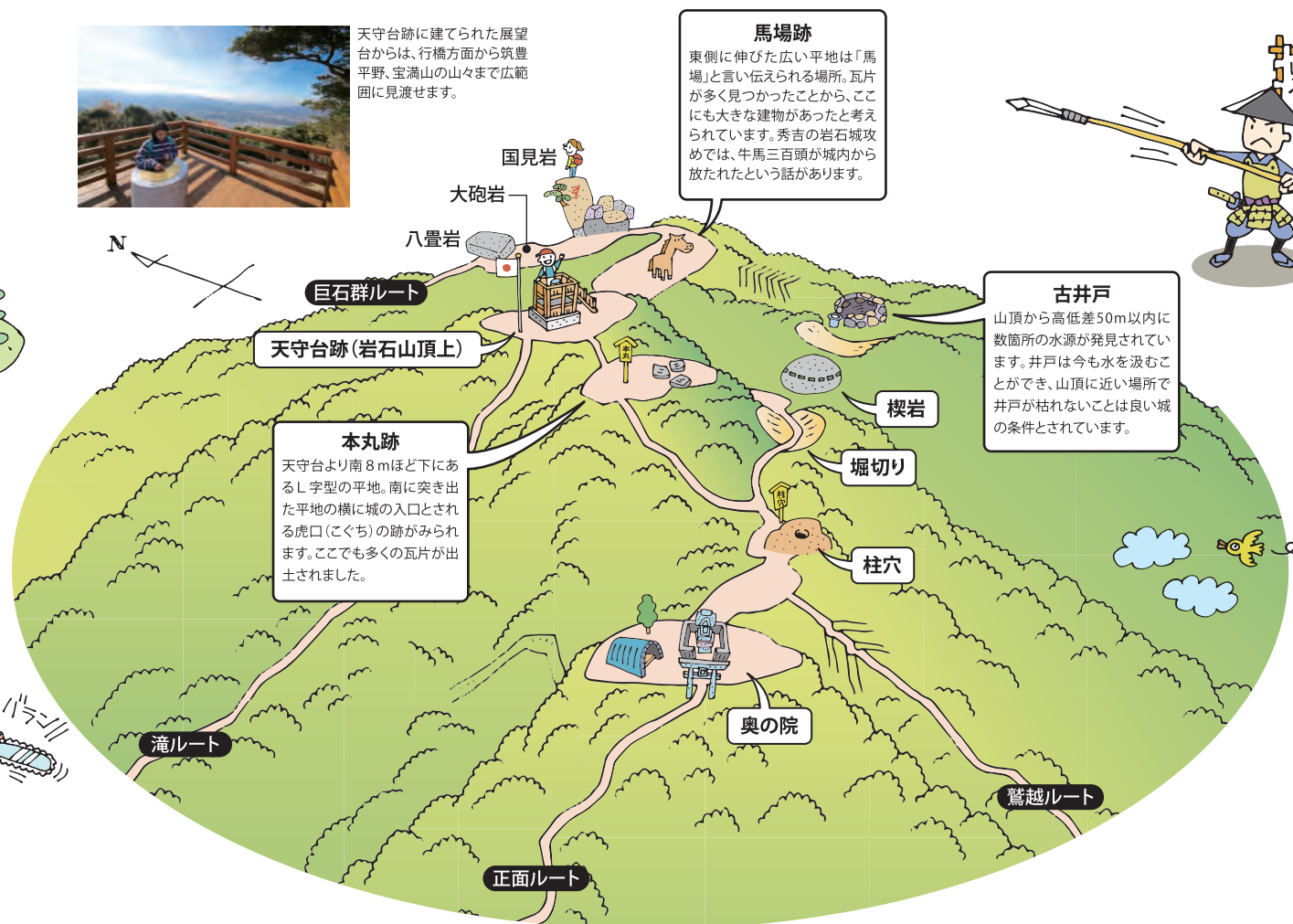


滝ルートの人気スポット「針ノ耳」

付録MAP F

岩石城跡を 歩いてみよう！

今からおよそ400年前まで、岩石山の山頂には「豊前」の堅城」と称えられた山城「岩石城」がありました。今でも奥の院（400m付近）から山頂（454m）にかけては、山城特有の名残を見つけることができます。城を守った武将たちの気持ちを想像しながら歩くと、またひと味違う山登りが楽しめます。



馬場跡

東側に伸びた広い平地は「馬場」と言い伝えられる場所。瓦片が多く見つかったことから、ここにも大きな建物があったと考えられています。秀吉の岩石城攻めでは、牛馬三百頭が城内から放たれたという話があります。

古井戸

山頂から高低差50m以内に数箇所の水源が発見されています。井戸は今も水を汲むことができ、山頂に近い場所で井戸が枯れないことは良い城の条件とされています。

本丸跡

天守台より南8mほど下にあるし字型の平地。南に突き出た平地の横に城の入口とされる虎口（とぐち）の跡がみられます。ここでも多くの瓦片が出土されました。

天守台跡 (岩石山頂上)

国見岩

大砲岩

八畳岩

巨石群ルート

楔岩

堀切り

柱穴

奥の院

正面ルート

鷲越ルート

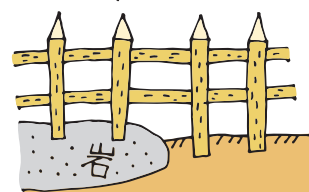
滝ルート



堀切り (ほりきり)

逆茂木 (さかもぎ)

木を切り倒して、枝の先を尖らせ、防衛に使う！



柱穴 (ちゅうけつ)



柱穴 (ちゅうけつ)

山道沿いに花崗岩にかけられた直径20cmほどの穴がいくつも並んでいます。「逆茂木」など外部からの侵入を防ぐための柵が立てられた場所だったと考えられています。



瓦片

山頂付近を歩いているとそこかしこに見つかる瓦の破片。小倉藩の最初の藩主だった細川忠興が治めていたころ、岩石城に使われていた瓦だと考えられています。



堀切り

左右対称V字に削られた谷。ここは敵の侵入路となる山の稜線を断ち切る防衛策として人為的に造られた「堀切り」です。何も知らないと普通の谷間にしか見えません。



楔岩 (くさびいわ)

四角い穴の列は、岩を割るための楔を打つために開けられたものです。岩石城跡で見られる楔跡は、戦国末期から江戸初期の築城に見られる石切技術で「矢穴」ともいいます。



空想!?

戦国岩石城復元絵図

岩石城【がんじやくじょう】

1158年～1615年

保元3(1158)年、平清盛が大庭景親に命じて築かせた岩石城は、中世の山城として数奇な運命をたどりました。元和元(1615)年の「一国一城令」により廃城となるまでの457年間、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏などに攻められ、幾度となく城主を変えながらも、豊前一の堅城として重要な戦略拠点であり続けました。



※搦手(からめて)＝城や砦(とりで)の裏門。(⇔大手)

岩石城とはいったいどんな城だったのでしょうか。麓から眺めれば左右に裾野を広げる美しい山ですが、いざ山中に入ると急峻な山裾には花崗岩の巨石が立ちはだかり、複雑に入り組む尾根と谷は深い断崖を形り、山頂への侵入は容易ではありません。まさに自然の要塞です。水も豊富にあり、築城にこだわりを持つ細川忠興(小倉藩初代藩主)も「百人兵を置けば十万の兵も防げる」とたたえたほど。

しかし、その当時の建物などの詳細を知る記録はほとんどありません。あるのは崩された石垣と、瓦の破片、いたるところに造られた堀切りや柱穴など…。これらを元に、天正15年4月、秀吉軍による岩石城攻めをイメージして当時の城の姿を思い描いてみました。

本丸や天守台にあるのは簡素な木造の館。石垣は「野面積み」という、自然の石をそのまま積む方法で、上から石を落とす目的があったといえます。城の周囲には「逆茂木」という樹木の先端を尖らせ敵に向けて置く防衛用の柵を配置。また城内には牛や馬も飼われ、戦いでは牛馬をつなぎ合わせ、尾に松明をつけて追いついたという話もあります。山上には馬ばかりでなく牛もいたと驚きです。

当時、秋月氏が支配していた岩石城を守るのは、大手(添田側)に芥田悪六兵衛、搦手(赤村側)に熊井越中守久重の兵力合わせて3千人。対して攻める秀吉軍は、大手に蒲生氏郷、搦手に前田利長、大將に羽柴秀勝の合わせて1万人。さらに鉄砲も大量にあります。

岩石城の城兵は果敢に戦いましたが、その日の夕方、秀吉の軍勢になった一日で岩石城を攻め落とされてしまいました。

岩石城を
築いた人

平清盛
たいらのきよもり

1118年～1181年

「保元の乱」以降、急速に地位を高めた平家一門。そんな平家隆盛の時代、保元3（1158）年、平清盛が大庭景親に築かせたのが岩石城です。平清盛や頼盛が大宰・大式に任ぜられたことから、豊前、筑前、肥前を平家が支配するようになりました。豊前は板井氏・宇佐氏（宇佐八幡宮）、筑前は山鹿氏（芦屋）、朝田氏（直方）が平家につき、英彦山や安楽寺（後の太宰府天満宮）の領域をも平家は徐々に侵略していきます、それらを守るために各地に山城を造り家臣を配置しました。



岩石城を
攻めた人

豊臣秀吉
とよとみひでよし

1536年～1598年

天正15（1587）年4月1日。蒲生氏郷、前田利長、大將・羽柴秀勝、合わせて1万人の秀吉軍が、岩石城を守る3千人の兵を攻めました。城側も激しく抵抗を続けましたが、豊前一の堅城と言われた岩石城もわずかに一日で落城。秀吉自らが30万もの大軍を率いた出陣には、島津の勢力を抑えるため、兵力をもつて敵方の戦意を喪失させる目的がありました。そのためには初戦の岩石城を短時間で攻略する必要があります。岩石城の落城後、九州の戦国大名たちは相次いで秀吉に下り、5月には島津も降伏。6月には九州国分令を発するという速さでした。



歴史に名を残した“岩石者”たち

GAN
JAKU
MON

岩石城を
守った人

芥田悪六兵衛
あくたあくろべえ

不明～1587年

芥田（嘉麻市）で生まれた芥田悪六兵衛は、六尺（約180cm）を超える大男で並外れた力の持ち主。天正10（1582）年、岩石城が秋月氏の勢力下にあった頃、3万の大友軍に取り囲まれ、秋月種実も討ち死に覚悟していたところ、悪六兵衛は単身丸腰で敵地にのり込み、油断した敵大將・臼杵中務を大力で倒して首をとったという武勇伝で知られています。名前の「悪」の字は、感謝として秋月種実がつけたという説も。秀吉による岩石城攻めでは熊井越中守久重と共に岩石城を守りましたが、加藤清正の家臣・貴田孫兵衛（前名・毛谷村六助）と素手で組み合い、あえなく討ち取られてしまいました。



岩石城を
再建した人

細川忠興
ほそかわただおき

1563年～1646年

慶長7（1602）年、徳川家康から関ヶ原戦の功績により、丹後から豊前に国替えとなった細川忠興は、藩庁を中津城から小倉城に移し、初代小倉藩主となりました。忠興は独自の行政単位である「手永」制度を導入して、添田地区を「添田手永」として統治しました。また9つある支城のうち岩石城にも再建の手を入れました。城跡に残る楔岩は細川の時代になつてからのもので、他にも当時のものと考えられる軒丸瓦や軒平瓦も見つかっています。しかし元和元（1615）年の一国一城令により岩石城は廃城となってしまいました。



岩石城と 小次郎

GAN JAKU MON

佐々木小次郎

不明／1612年4月13日

巖流島の決闘の疑惑

慶長17(1612)年4月13日。関門海峡に浮かぶ小さな島・巖流島。約束の時間に遅れてやってくる宮本武蔵――

「遅いぞ武蔵！」

テレビや漫画でお馴染みの名シーンですが、このイメージはすべて吉川英治氏の小説『宮本武蔵』がベースとなっています。そしてこの小説の基となったのは、巖流島の決闘から約140年後に書かれた『二天記』という書物でした。

決闘について書かれた最も古い記述は、武蔵の養子・宮本伊織によつて建てられた『小倉碑文』に刻まれています。決闘シーンでは「両雄同時に相会す」とあります。こちらでは武蔵は遅

刻していないことになっています。もともと信頼できるとすれば武蔵本人が書いたものですが、武蔵の著書に巖流島の件は1行も見つかりません。まるで何も語りたくないかのようです。

今まで小次郎は武蔵と二対一の決闘で武蔵の一撃で絶命したとされてきました。しかしそれを覆す記録があったのです。門司城代・沼田延元の記録をもとに綴られた『沼田家記』(1672年)です。延元は小倉藩細川家の家老で、決闘は延元が門司城代だった時代。延元もこの件に関わっていると考えられ、その信憑性は極めて高いとされます。――家記によれば豊前と長門の間(関門海峡)のひく島(巖流島)で、双方弟子は二人も連れ

てこないよう約束し、試合を行ったが、小次郎が打ち殺されてしまった。

小次郎は約束通り弟子は一人も来なかったが、武蔵の弟子は隠れていた。

小次郎はその後蘇生したが、武蔵の弟子たちに殺された。この事が小次郎の弟子たちに伝わり、武蔵を打とうと大勢でひく島へ向かった。武蔵は門司へ渡り、延元様を頼りに助けを求めたので、城中にかくまい、武蔵は難を逃れる事ができた。その後武蔵を石井三之丞という馬乗り鉄砲の者をつけて無事に豊後へ送り届け、無二斎(武蔵の父)に渡した。(要約)

なんと小次郎はまだ生きていて武蔵の弟子たちに殺されたというのです。しかも武蔵は門司城にかくまわれ、馬と鉄砲までつけて豊後へ送り届けられるという格別の待遇。これは単なる武芸者同士の闘いではなさそうです。おそらく小次郎が勝ったとしても隠れた者たちに殺されていたでしょう。もしもこの決闘が藩の謀略だったとしたら、決闘という方法で小次郎を始末しなければならなかった藩側の理由があるはず。こうした疑問から見えてくるのが、豊前・岩石城を居城としていた佐々木一族との接点なのです。

小次郎は岩石山で育った？

小次郎の出生について『二天記』では越前の生まれとされていますが、それには根拠がありません。しかし近年、有力な説として注目を集めているのが、鎌倉時代より豊前の地頭として添田を治めていた佐々木一族の出身とする説です。しかも豊前で佐々木性を名乗る豪族は添田の佐々木家のみです。

当時の添田は英彦山を中心とする修験道が栄興を極めた

時代。周辺大名の支配から独立を守るため、英彦山の山伏たちは修験道とともに武芸にも励みました。英彦山の麓に位置する岩石山もまた英彦山の配下であり、岩石山を治める佐々木一族は当然に英彦山との深い関係がありました。

小次郎の武芸はこうした山伏たちの兵法を学び、幼い頃から岩石山で修業を積み剣を極めたのではないかと考えられるのです。なにより小次郎の「巖(岩)流」は「岩石山」に由来し、さらに小次郎が使っていた刃長3尺余(約1メートル)の野太刀(通称・物干し竿)も、山伏たちが使用していた杖(錫杖・しゃくじょう)を思い起こさせます。

江戸時代になり、剣術の腕を見込まれた小次郎は細川家の兵法指南役に召し抱えられました。しかし依然として佐々木一族は英彦山を背景とした勢力で藩を脅かす存在。小次郎の仕官は佐々木一族の動きを見張るためとも考えられますが、小次郎自身の力が次第に大きくなるのを恐れた藩は、小次郎の抹殺を考える……それがこの巖流島の決闘だったのでは――武蔵が決闘を語らないのは、こうした仕組まれた決闘だったからではないでしょうか。小次郎の死後、佐々木一族は小倉藩により排斥され一族全員が刀を置いています。

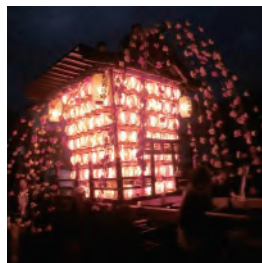
岩石山頂上の岩には修験の場であることを示す梵字が刻まれています。小次郎も岩石山で山伏剣法の技を身につけようと山を駆け巡っていたかもしれません。岩石山に登ると、純粹無垢な一人の若武者をふと想像してみたくになります。日本一の剣士を夢見て、岩石山の頂に立つ若き日の小次郎の姿を。



↑ 魔除けのために玄関に飾られているバレン

← 白壁が美しい中島家住宅の前など広範囲に巡行する添田本町地区の山笠

↓ 夜の添田本町地区を練り歩く提灯山笠。昼間とはまったく趣が変わります



昼はバレン、夜は提灯が城下に揺れる 二つの顔をもつ添田本町の神幸祭

「ワッショワッショイ」の掛け声に合わせて、華やかな飾りをまとった山笠が、日田道の白壁の中を進みます。添田本町が「賑やかになる」「神幸祭」です。

添田本町地区の神幸祭は、彦山神幸祭と祇園祭の二つの流れをくむ祭りとして、毎年5月第2土・日曜で行われています。

現在の神幸祭は、五穀豊穡を願う神幸祭に、疫病で亡くなった方への鎮魂と無病息災を祈念する祇園祭が一緒になったものです。昔は、上添田にある須佐神社から神輿が本町地区まで巡行し、それに山笠が連なりました。

祭りの主役は何と言っても美しい「花笠バレン」を垂らした山笠行列です。花笠バレンは、色染めした和紙を花形に切った「花切」を、色紙を巻きつけた5mほ

どの割竹に付け、稲穂に見立て山笠に垂らす花飾りです。

この花笠飾りを施された山笠は、夜になるとその姿が一変します。神幸祭両日の前夜には、同じ山笠に花笠バレンではなく、幻想的な光を放つ提灯が飾られ、街並みを練り歩きます。これこそ祇園祭の名残であり、夜は提灯で飾られた提灯山、昼間は花笠バレンの山笠に変身するという珍しい仕様になっているのです。

祭りが終わる頃、山笠に飾られたバレンを人々がもらって帰ります。輪っかにしたバレンを屋根の上に投げ上げて家守りとしたり、災い除けのため玄関先に飾る風習があるのです。日田道を歩くと今でもあちらこちらの玄関や軒先に花笠バレンの輪を見かけることができます。



日田道を歩く。

岩石山の麓に広がる添田本町を南北に貫く街道筋。小倉と天領日田とを結ぶ旧小倉街道、別名「日田道」と呼ばれる街道です。慶長7(1602)年、初代小倉藩主・細川忠興は「手永(てなが)」という行政統治制度を導入しました。田川郡には6つの手永が配置され、その一つを日田道筋にある添田に設けました。以来、この町は添田手永の中心地として栄えたのです。



← 添田本町(下町・町三)で使われていた山笠法被。



国指定重要文化財 中島家住宅

真っ白に輝く漆喰壁が古い街道筋に存在感を放つ中島家住宅。通りに面した平入りの主屋は銀色の瓦屋根が大きく見え圧倒されます。中島家は江戸時代に蠟燭(はぜろう)の製造で財を成し、名字帯刀を許された旧家で、明治以後は酒や醤油を作っていたそうです。屋敷の奥には岩石山を借景とした広大な庭園があり、往時の繁栄を物語っています。

付録MAP L



町指定有形文化財 中村家住宅

付録MAP ①

中村家は古くから酒造業を営んでいましたが、明治期末に醤油製造に転向。平成10年に廃業するまで多くの人に愛されてきました。現在の建物は、大正初期のもので、妻壁の中央には(中)の紋と、3つの大きな漆喰納戸を備えた外観が印象的です。



とわたり 戸渡酒造

大正元年創業。添田で唯一という老舗の蔵元です。真っ白な白壁と赤い瓦が青空に映える大きな蔵は、大正時代に建てられたもので、その当時からとても大きな酒蔵だったことがわかります。人気のお酒は代表銘柄「豊駒」、「英彦山天狗酒」。どちらも添田でしか買うことのできない希少酒です!素朴な蓬(よもぎ)の焼餅「ふつもち」も焼いています。

〒福岡県田川郡添田町添田1448

☎0947-82-0027

☎9:00~18:00 休木・日曜・年末年始

付録MAP ①



ほうこうし 法光寺

付録MAP ①

法光寺は1474年に門司で創立。慶長年間に岩石城大手門跡に寺地を拝領された由緒ある寺です。不動川に架かる石橋の先には、岩石城の大手門を移築したといわれる総けやき造の山門を構え、上部には細川家の家紋「九曜紋」が掲げられています。また山門脇には元禄16(1703)年に造られた梵鐘も残っています。



日田道に賑わった 城下町の風情

おなりもん 御成門

付録MAP K

小倉藩主細川家が行政区画として導入した「添田手永」の大庄屋・中村家に残っている藩主や貴人を迎えるための門。鷹狩りや英彦山参詣の際には必ずこの御成門から藩主を迎え入れました。



添田公園

付録MAP G

添田本町から岩石山へ向かう途中、桜の名所と名高い添田公園があります。昭和6年に都市公園として開園した公園で、春にはソメイヨシノをはじめ約1600本の桜が園内を彩ります。秋も岩石山全体の紅葉が色を添え、四季を通して色彩豊かな表情を楽しませてくれます。公園内には「添田美術館」や福祉施設「そえだジョイ」の展望大浴場もあるので登山の後にお薦めです。



岩石山・添田公園・添田本町
ガイドブック「岩石者」
ガイドマップ「岩石山 山のぼりマップ」

発行日／平成28年3月
発 行／添田町 まちづくり課

〒824-0691
福岡県田川郡添田町添田2151
TEL 0947-82-1231(代表)
FAX 0947-82-2869
<https://www.town.soeda.fukuoka.jp/>

監 修／宇佐見正生
梶谷敏明
熊谷信孝

添田町歴史的風致維持向上 計画について

歴史的風致とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されており、歴史的風致を維持及び向上させ、後世に継承することを目的に平成20年に施行されました。これまでに、歴史まちづくり法に基づき、全国の51市町(平成28年3月1日時点)の歴史的風致維持向上計画が認定されており、本町は全国で46番目、福岡県下では太宰府市に続き2番目に認定されました。

本書は国指定重要文化財・中島家住宅を含む本町地区と、歴史と自然に恵まれた岩石山および添田公園に至る地域を一体的な周遊路として町内外にPRするために作成したものです。



今川の里

磯辺、塩チーズ、ウインナー、ゆずこしょう…全部で15種類の創作たこ焼。どれも絶妙な組み合わせで、ふわトロツとした食感が人気です。またシャキシャキのもやしが入ったぶりのったヘルシーな「もやしそば」(350円)と、名物たこ焼の両方が味わえるセット(530円)もお薦め!懐かしいテレビやオーディオが並び店内と、東田さんご夫婦の優しい笑顔にも癒されます。
〒福岡県田川郡添田町添田2120
☎0947-82-2711
🕒10:00~18:00(祝日17:00)
📅日曜・不定
付録MAP P



押川かしわ専門店

創業1967年。店に入るとすぐ目の前で店主・押川軍一朗さんが大きくとてもきれいな丸鶏を、巧みな包丁づかいで手ぎわよくさばいています。名物は高温の油でじっくり香ばしく素揚げされる唐揚げ。シンプルな味付けで、鶏が持つ旨味をストレートに味わえます。昔は養鶏場も経営していたという押川さん、鶏肉に対するこだわりは誰にも負けません!
〒福岡県田川郡添田町添田2526
☎0947-82-0614 🕒10:00~19:00
(唐揚げの予約は閉店20分前まで受付)
📅不定(直接お問合せください)

付録MAP N



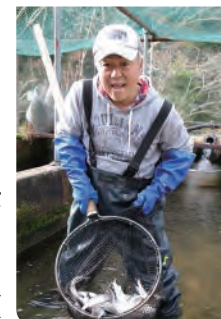
ホツとできる
添田のグルメ



篠崎川魚店

先代より数えて約50年。日田道沿いに、ヤマメ、スッポン、鯉、鮎、鰻などの川魚を専門に販売するお店があります。ヤマメは彦山川最上流部にある専用の養魚場で、英彦山から流れ出る清流を使って大事に育てられた新鮮なものばかり。一般客でも購入でき、ヤマメは塩を多めに振りグリルで焼けば、自宅でも簡単に美味しくいただけます(1匹250円)。
〒福岡県田川郡添田町添田1880
☎0947-82-0504 🕒9:00~18:00
📅火曜・不定

付録MAP M



山口油屋福太郎 添田町めんべい工場

博多土産の定番!程よい辛味と魚介の旨味をぎゅっとつめた辛子めんたい風味のおせんべい「めんべい」を作る工場です。工場では、めんべいの製造工程を見学したり、めんべいの試食も楽しめます。またショップではバリエーション豊富なめんべいも購入できるので、多くの観光客が訪れる人気スポットになっています。
〒福岡県田川郡添田町添田2282
☎0947-31-4040(見学は要予約)
(ショップ)🕒9:00~17:00 📅年末年始
※見学の詳細は直接お問合せください。

付録MAP O

